The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	直示用法における日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究 : 視点の融合と視点の対立を手掛かりに
Author(s)	巴雅尔, 都楞
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2014, 48, p. 71-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56601
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

直示用法における日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究

――視点の融合と視点の対立を手掛かりに――

巴 雅 尔 都 楞（バヤロドウルン）

キーワード：個人領域／視点の対立／視点の融合

1. はじめに

日本語の指示詞はコ・ソ・アの3系列に対し、モンゴル語[1)]の指示詞は、基本的に近称e系と遠称te系の2系列[2)]だとされている。

日本語の指示詞の研究では、しばしば、「融合型」と「対立型」に分けて分析されている。また、融合型と対立型という概念は、指示詞だけではなく、移動表現、授受表現の用法を記述する上でも有効であるとされる（金水1989：1）。さらに近年、金（2006）、木村（2012）など対照言語学研究においてもこの概念が利用されている。

しかし、指示詞体系が3系列の言語と2系列の言語とでは、「融合型」と「対立型」がそもそも同じなのかという疑問がある。従来の研究はほとんど日本語の指示詞の「融合型」と「対立型」という概念をそのまま援用してきた。本稿では「融合型」と「対立型」を「個人領域」と「視点」という二つの概念を導入して新たな定義を行うため、「視点の融合」と「対立の視点」に改める。

本稿の目的は、個人領域[3)]と視点という概念を用い、モンゴル語と日本語の指示詞の対照を通じて、両言語の指示詞の共通点と相違点を明らかにすることである。

結論を一部先取りすれば、視点の融合においては、日本語指示詞は、統合型と共同型の二つのタイプがあり、それに対し、モンゴル語指示詞は統合型しか持たない。また、視点の対立の場合は、日本語指示詞は完全対立型であるが、モンゴル語指示詞は補助対立をなす。

2. 先行研究

2.1 日本語の指示詞に関する先行研究

日本語の指示詞の研究は、数多くある。三上（1955：177）はコ・ソ・アの三項対立の指示関係に反論し、「コレ対ソレ」、「コレ（ソレを吸収）対アレ」の二種二項であると主張している。日本語の指示詞が三項対立か二項対立かという議論を進めたのは、正保（1981）である。正保（1981）は、指示詞コ・ソ・アは対立型と融合型による三者共存の三項対立であると主張し、現場指示（本文での直示）を以下のように説明している（正保 1981：75）。

融合型：

コ：それに対する「われわれ」の関心が強いもので、近くにある人/物。

ソ：「ア」で指すには近すぎるもの、若しくは、話し手と聞き手の何れか一方或は両者の視野にないもの。

ア：それに対する「われわれ」の関心が強いもので、遠くにあるもの。

対立型：

コ：話し手が、自分のなわばりにあると認定した人/もの。

ソ：話し手が聞き手のなわばりに属するものとして認定した人/もの。

ア：話し手が、「自分」の領域にも、「相手」の領域にも属さないと考えたもの。

その他、金水・田窪（1992）は「融合型」と「対立型」を指示詞の運用

における要素探索の方略として考えている。

融合型探索（日本語）：融合型は、主にコとアの対立に関わる。

a. コで話し手の近くにある要素を指し示せ。

b. アで話し手から遠くにある要素を指し示せ。

対立型探索（日本語）：対立型は話し手と聞き手の視点を対立的に捉える探索方略であり、聞き手側の要素をソで指し示せ。（そうではない要素は融合型探索その他を発動せよ。）と解釈されている。

金水・田窪（1992：128～132）

田窪（2010：174）は融合型と対立型の基本的な差異は、同じものに対して、話し手・聞き手が同じ呼び方をするかそれともそれぞれ別の呼び方をするか、として捉えることができるとしている。

本発表は金水・田窪（1992）と田窪（2010）の考え方を参考にしつつ、視点の融合に関しては、いわゆる中距離のソも考察の対象とする。

視点の融合には、コ系、ソ系、ア系の指示詞が使用され、視点の対立においてはコ系とソ系の対立が見られると考える。

2.2 モンゴル語指示詞に関する先行研究

モンゴル語の指示詞の研究は小沢（1997）、清格尔泰（2000）、哈斯額尔敦等（1996）などがあるが、どれも分類にとどまり、詳細な分析を欠いている。また管見の限り、「融合型」と「対立型」という観点からのモンゴル語指示詞の研究はまだないようである。

3. 問題提起及び仮説

3.1 問題提起

指示詞体系が 2 系列言語と 3 系列言語の対照研究では、その指示詞同士の対応関係を明らかにすることを目的にした研究が少なくない。それに対し

て、本研究は、その対応関係の背景にあるメカニズムを少しでも明らかにすることを目的とする。すなわち、2 系列指示詞と 3 系列指示詞の指示機能をより一般化することを目指すものである。

今までの日本語の指示詞の問題点は以下のようにまとめることができる。

まず、指示詞の直示用法に関する研究においては、話し手と聞き手の向いている方法が同じであれば、「融合型」で、話し手と聞き手が向かい合っていれば、「対立型」だとするのが、一般的である。しかし、例えば、話し手と聞き手が向かい合って座っていても、視線を同じくすれば、「融合型」の指示詞が普通に使えるように思われる。

次に、日本語の指示詞の研究で、議論が山積しているのは、ソ系指示詞であり、その中でも、ソ系（いわゆる中距離のソ）が使用される原理についての追究が足りないように思われる。

もうひとつは、指示詞体系が 2 系列言語と 3 系列言語の対照研究においては、個人領域と視点を用いて再定義した「視点の融合」と「視点の対立」という概念を導入することで、指示詞の使用原理を無理なく説明できるようになると考えられる。

3.2 仮説

ここで、個人領域を設定する。個人領域とは、談話参加者である話し手と聞き手がそれぞれ己の言語や行動などが他人に干渉されたくない範囲のことである。この個人領域は物理的空間のほか、心理的、時間的な要素を含む。

次に、本発表でいう視点（対立、融合とも）には話し手自身の視点と、話し手が想定する聞き手の視点がある。

個人領域と視点という概念を使用して、日本語の指示詞のいわゆる「融合型」と「対立型」を解釈し直すと、視点の融合と視点の対立は、以下のようになる。

視点の融合：

①統合型とは、話し手が、自身の個人領域や視点が聞き手のそれと完全に重

なると認定するタイプである。

話し手の個人領域内のものをコで指し、個人領域外のものをアで指す。

②共同型は、話し手と聞き手の個人領域が完全に重ならないときだけ現れ、視点の対立は存在しないと考えるタイプである。

重なった領域内のものをコで指し、領域外をソで指す。

視点の対立：

話し手と聞き手の視点が個々で独立し、対立すると共に、個人領域も視点の対立をなす。これを完全対立型と呼ぶことにする。

話し手の個人領域にあるものをコで指す。

聞き手の個人領域にあるものをソで指す。

本発表で使われる「直示用法」は金水（1999）に従い、以下のように定義をしておく。

直示の定義：

談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取りこむことである。

金水（1999：68）

4. 日本語の指示詞

4.1 視点の融合

4.1.1 統合型

統合型は今までの研究では「融合型」と呼ばれてきたものである。三上（1955）では「融合型」について以下のように述べている。

相手と話手とは「我々」としてぐるになり、楕円は円になる。相手自身は消えることはないが、「ソレ」の領分は没収されてしまう。円内がコレ的で円外がアレ的である。（三上 1955: 178）

次の例（1）は、指示対象が話し手の個人領域の中にあるものであり、例

（2）は話し手の個人領域の外にあるものである。直示においては、物理的距離の遠近で決められることが多い。話し手と聞き手が同じ系列の指示詞を使用するのも視点の融合の特徴である。

（1）（二人の目の前にある車）

A：この間、買ったというのは、この車ですか。

B：はい。これです。

（2）（ガイドが30m先のお寺を見て）

ガイド：あれが清水寺です。

観光客：あれがあの有名な清水寺ですね。

（3）（遊園地に行って）

ここはもう飽きた。あそこへ行こう。

例（3）は現在地をコで指し、行き先をアで指している。ア系について以下のような指摘がある。

> アで指し示される対象は、「話し手が現在働きかけられないもの・処理不能あるいは処理済みのもの・勢力を及ぼせないもの」である。
>
> （金水・田窪 1992:187）

上記を話し手の個人領域に還元すれば、その反対が「話し手が現在働きかけているもの・処理中のもの・勢力を及ぼしつつあるもの」（金水・田窪 1992:187）であり、個人領域内のものを指すことになる。

4.1.2 共同型

これまでの研究で疑問が残されているのは、この共同型である。いわゆる中距離のソが現れる場面である。この共同型については、先行研究において十分に検討されているとは言い難い。

中距離のソ系が出現する条件をみてみると、まず、話し手と聞き手の個人領域が、それぞれ存在すると仮定したことで、ア系が現れにくくなる。次

に、視点が対立しないため、中距離のソ系は視点の融合であり、視点の対立のソ（聞き手領域のソ）と異なる。

（4）お客：そこの角を右に曲がってください。

タクシーの運転手：はい、そこの角ですね。

例（4）は典型的な中距離のソ系の例である。例（5）のようにものを指すときにも使われる。

（5）父と杉に別れて、私は恭子と名代子のところへ戻った。

「お待ち遠おさま」

恭子は、振り返って、

「ねえ、あのセーター、いいと思わない？」

「どれよ」

「その左から二番目の」

「ああ、あれね、若奥様向き、というところね」

（中略）

私たちは、ショーウィンドーの前をはなれた。

阪田（1992：60）

阪田（1992）は、話し手（恭子）が同じセーターを指して、ア系を使ったり、ソ系を使ったりしているのは、相手（私）の位置の動きによるものだとしている。つまり、話し手がア系を使ったとき、相手は話し手のうしろにいたが、ソ系を使ったときには、相手がすでに話し手と並ぶ位置にいたと説明している。しかし、この説明で納得できるだろうか。

例（5）は、上でみてきた視点の融合という概念を使えば、無理なく説明できる。話し手は聞き手の個人領域が自分の個人領域と統合していると認識して、ア系を使用したが、聞き手は指示対象を確認できなくて、「どれよ」と確認作業を行う。そうすると、話し手は聞き手と個人領域が異なることに気付き、すぐに統合型から共同型に切り替える。その結果、ソ系が出現することになる。

4.2 視点の対立

日本語の視点の対立は、話し手と聞き手の個人領域と視点ともに対立関係をなす。

(6)（相手のかけているメガネをみて）

そのメガネ、かっこいいですね。

(7)（相手の近くにある自分のコップをみて）

そのコップを取ってくれる。

例（6）の指示対象は聞き手のかけているメガネである。また、例（7）は聞き手の個人領域にあるコップが指示対象である。

5. モンゴル語の指示詞

モンゴル語の指示詞は近称のe系と遠称のte系の2系列からなる。モンゴル語の指示詞において、「話し手から近いものをe系で指し、話し手から遠いものをte系で指す」清格尔泰（2000）というのは、一般的な説明である。しかし、実際、モンゴル語指示詞の運用においては、話し手からの距離による説明だけでは、説明できないものが存在する。

(8)（歯医者さんに行って、歯の治療を受けている場面である。）

EMCI： ende ebedn_eüü ?

ここ 痛い Q

EBEDCITEN： aa、 tende tende.

あっ そこ そこ

医者：ここ、痛いですか。

患者：あっ、そこ、そこです。

例（8）は、指示対象が話し手自身の歯であるのにもかかわらず、遠称のTe系を使用している。この例を物理的距離の遠近で説明するのには、無理

がある。従って、モンゴル語の指示詞の定義は、従来の話し手から指示対象までの物理的距離で説明してきたものを、時間的、心理的距離まで拡張する必要があると思われる。すなわち、本稿における個人領域である。この個人領域という概念でモンゴル語の指示詞を定義すると以下のようになる。

話し手の個人領域にあるものは、e系で指し、話し手の個人領域の外にあるものをte系で指す。

モンゴル語の指示詞は基本的に視点の融合が中心になっているが、視点の対立を成さないわけではない。聞き手領域のものを普段、近称のe系で指示するが、視点の対立だと捉え、te系で指し示すこともある。

モンゴル語の指示詞:

視点の融合は、話し手と聞き手の個人領域や視点が完全に重なりあう統合型である。

視点の対立は、話し手が聞き手領域のものを遠称のte系だと捉え、さらに文法的な手段を借りて成り立つ補助型である。

5.1 視点の融合

モンゴル語指示詞の視点の融合は、統合型しかない。この点で日本語指示詞と異なる。

(9) A：surgaguli-in　bairi <u>ende</u> bai=n_a　uu？
　　学　校-GEN　寮　ここ ある-PRES　Q
　B：<u>ende</u> bai=hu　güei.　tende bai=na.
　　ここ ある-VN NEG　あそこある-PRES
　A：学生の寮は<u>ここ</u>にありますか。
　B：<u>ここ</u>にありません。あそこにあります。

(『モンゴル語基礎文法』：73)

（10）（旅をしている師匠と弟子の会話）

ŠABI：bagši　e、　tere　yagu-nu　gerel　bui？
　　先生　MP　あれ　何-GEN　光　Q

BAGSI：tende　ail　bai=hu　yöm　bai=n_a.
　　あそこ　家　ある-VN MP　ある-PRES

（『蒙古民间聊斎志异』：175）

弟子：〔先生、あれは何の光かな。〕

師匠：〔あそこに家があるんだね。〕

例（9）と例（10）は、話し手自身の領域が聞き手の個人領域と完全に重なり合っていて、かつ視点も異ならないことを表している例文である。話し手と聞き手の使っている指示詞が同じであることもその表れである。

（11）（川に入り、服を濡らして出てきた商人に対し、愚か者の妻が発したことばである。）

TENEG IN EHENER：nige　magu　tašigur-un　tölüge　yagun-du　eimü
　　一つ　悪い　鞭-GEN　ため　なぜ-D/L このような

saihan　hobcaso hunar-iyan[4)]　bör　norga=ciha=dag　bui？
きれいな　衣装（複合語-REFL　全部　濡らす-しまう-CVB　Q

（『蒙古民间聊斎志异』：216）

愚か者の妻：〔なぜつまらない鞭のために、そのようなきれいな服をぬらしちゃったのか。〕

（12）（羊飼いが何であるか分からない二重層になっている白い平べったいものを拾ってきて、家に入るや否や家の奥にいた妻が発したことばである。）

EHENER：egün-yi＜　ula　mönggü＞gedeg　yöm.
　　これ-ACC　足裏　銀　という　MP

（『蒙古民间聊斎志异』：267）

妻：〔それは足裏の形をした銀だ。〕

例（11）例（12）は、日本語の聞き手領域にあるものが指示対象になっている。モンゴル語では、聞き手の領域のものであっても、話し手が自分の個人領域に取り込むことがある。これは上述したようにモンゴル語には、聞き手領域を専門的に指示する指示詞が存在しないためである。

5.2 視点の対立

モンゴル語指示詞にも視点の対立が存在する。それは、普段、聞き手の個人領域を取り込んだ視点の融合から、聞き手の個人領域のものを遠称で指示し、対立的に捉える方略である。つまり、二人称代名詞（ci）や二人称所有辞（cini）や再帰辞（ban、ben、iyan、iyen）などを使い、聞き手と関連付けるというものである。

（13）A：tegün-i nada-du ögü=gerei !
それ -ACC 1-D/L くれる -OPT

B：yagu bui ?
何 Q

A：tere orun degree bai=hu ≪MONGGOL HELE SORHO BICIG≫-yi
その ベッド 上 ある -VN『モンゴル語教科書』-ACC

B：ci ene hiciyel-un debter-yi heregle=jü bai=n_a uu ?
2 この 教科 -GEN 本 -ACC 使う -CVB いる -PRES Q

A：それを私に取ってください。

B：何ですか。

A：そのベッドの上にある≪モンゴル語教科書≫を。

B：あなたはこのテキストを使っていますか。

（『モンゴル語基礎文法』：84）

例（13）の日本語訳をみれば、視点の対立であることが明らかである。つ

まり、同じ指示対象であるテキストをA（話し手）はソレで指し、B（聞き手）はコノで指している。また、会話内容から話し手と聞き手は室内にいてお互いの距離はそれほど遠くないことも容易に推測できる。モンゴル語において、話し手は、聞き手と指示対象との距離が自分と指示対象との距離より、短いと相対的に判断したと考えられる。よって、対立的に捉え、遠称のte系が使用される。

（14）（絵を描いている相手に対して話し手がやめるように説得する）

Süre: ügei　eji e !　　bi ene　　jirug-iyan・・・・

NEG　おばさん　1　この　絵- REFL

Ail-un eji:teimü e!　　c　tere　jirug-iyan　unda=ju　　bosu=gad　　jiru.

そう　感嘆 2　その 絵-REFL　寝る-CVB 起きる-CVB　画け

『höhe　dülü③：145』

スレ：違う、おばさん。私、この絵を・・・・

おばさん：そうね、あなた、その絵は寝て起きてから画きなさい。

例（14）も話し手と聞き手が対立をなす場面である。二人称代名詞ciと再帰所有辞eyenを使用して、その絵とスレを関連づけるのである。

上記をまとめると、モンゴル語指示詞においては、視点の融合は無標であり、視点の対立は有標である。

6. 日本語とモンゴル語の対照

分析を進めると、日本語とモンゴル語の視点の融合の統合型は、一見同じに見えるが、実はだいぶ異なることがわかる。

（15）（指示対象：話し手の手にある本あるいは鞄の表と裏を指す場合）

nom-un　　ene　tal_a ni cagan,　tere　tal_a ni har_a.

本-GEN　　この 側　　TOP白い　あの 側　　TOP黒い

本のこっち側が白い、反対側が黒い

例（15）のようにモンゴル語では近称と遠称の指示詞が使用されるが日

本語においては、遠称の指示詞であるア系が現れにくい。また、例（17）は話し手の近く、同じ距離にあるものを指示詞で指し示す例である。この場合もモンゴル語では指示詞が使用されるが、日本語では遠称の指示詞が使われることはない。

（16）（話し手から近い所に、赤りんごと青りんごを横に並べておいてある）

ene　ulagan almurad　ni　tere　nogugan　almurad-aca　amda=tai.
この　赤い　リンゴ　TOP あの 緑　リンゴ-ABL　味-POS
こっちの赤りんごはこっちの青りんごよりおいしい。

（17）（話し手から1m以内の距離にある縄の手前と奥にある指示対象）

degesün-u　ene　tal_a-du cicig　tari=ju、　tere　tal_a-du yahu　cu
縄-GEN　この 側-D/L 花　植える-CVB　あの 側-D/L 何　も
dari=hu　ügei.
植える-VN NEG

縄の手前には花を植えて、縄の奥（向こう側）には何も植えない。例（17）も同様にア系は現れにくい場面である。例（15）から（17）をみると、独り言や内言あるいは、聞き手を無視できる場面において、2系列の指示詞体系をもつモンゴル語では指示詞が使用されるのに対し、3系列の指示詞体系を有する日本語においては、遠称のア系が使いにくいことが明白である。直示用法では、日本語のア系指示詞はコ系（操作可能性）と対照的に、話し手と指示対象との間には距離がある程度あったほうが望ましいという客観的「距離の制約」が必要とされる。これは、吉本（1992：118）でも、「わずか数秒前の時点はいくら過去でも「アノ時」で指示することができない。」という記述と一致する。まさにこの特徴から日本語の中距離のソ系が現れる環境が整ったといえよう。

7. まとめ

日本語の指示詞の機能や用法を分析する際に、個人領域と視点という二つの要素を設定するほうが、従来の「融合型」と「対立型」より有効な手段であることが確認できた。これは、モンゴルの指示詞においても同様なことがいえる。

しかも、日本語の視点の融合には、統合型と共同型があるのに対し、モンゴル語では統合型しか存在しない。また、視点の対立においても日本語は完全対立型に対し、モンゴル語は補助対立型であることが明らかになった。

・グロスの省略記号の対応は、次の通りである。
ABL：奪格、ACC：対格、CVB：副動詞語尾、D/L：与位格、GEN：属格、MP：ムードの小辞、n：隠れた n、NEG：否定、OPT：希求、POS：所有語、PRES：現在未来、Q：疑問助詞、REFL：再帰所有、TOP：トピック、VN：形動詞語尾、1：一人称、2：二人称、_　語末分かち書き母音、- 助詞境界、=　接辞境界を示す。

［注］

1）　筆者はヘシギテン出身で、モンゴル語チャハル方言の話者である。チャハル方言は、内モンゴルのモンゴル語諸方言の標準口語として選ばれ、内モンゴル自治区錫林郭勒盟ショローンフフ・ホショー（正藍旗）のモンゴル人によって使用される。本発表のデータに関しては、出典が表記されてないものは、発表者の内省によるものである。翻訳においても出典が記述されてないものは発表者によるものである。モンゴル文字のローマ字転写は以下の通りである。
᠄᠊᠋᠌᠍᠎᠏᠐᠑᠒᠓᠔᠕᠖᠗᠘᠙᠚᠛᠜᠝᠞᠟ᠠᠡᠢᠣᠤᠥᠦᠧᠨᠩᠪᠫᠬᠭᠮᠯᠰᠱᠲᠳᠴᠵᠶᠷᠸᠹᠺᠽᠾᠿᡀᡁᡂᡃᡄᡅᡆᡇᡈᡉᡊᡋᡌᡍᡎᡏᡐᡑᡒᡓᡔᡕᡖᡗᡘᡙᡚᡛᡜᡝᡞᡟᡠᡡᡢᡣᡤᡥᡦᡧᡨᡩᡪᡫᡬᡭᡮᡯᡰᡱᡲᡳᡴᡵᡶᡷᡸ᡹᡺᡻᡼᡽᡾᡿ᢀᢁᢂᢃᢄᢅᢆᢇᢈᢉᢊᢋᢌᢍᢎᢏᢐᢑᢒᢓᢔᢕᢖᢗᢘᢙᢚᢛᢜᢝᢞᢟᢠᢡᢢᢣᢤᢥᢦᢧᢨᢩᢪ᢫᢬᢭᢮᢯ᢰᢱᢲᢳᢴᢵᢶᢷᢸᢹᢺᢻᢼᢽᢾᢿᣀᣁᣂᣃᣄᣅᣆᣇᣈᣉᣊᣋᣌᣍᣎᣏᣐᣑᣒᣓᣔᣕᣖᣗᣘᣙᣚᣛᣜᣝᣞᣟᣠᣡᣢᣣᣤᣥᣦᣧᣨᣩᣪᣫᣬᣭᣮᣯᣰᣱᣲᣳᣴᣵ᣶᣷᣸᣹᣺᣻᣼᣽᣾᣿ᤀᤁᤂᤃᤄᤅᤆᤇᤈᤉᤊᤋᤌᤍᤎᤏᤐᤑᤒᤓᤔᤕᤖᤗᤘᤙᤚᤛᤜᤝᤞ᤟ᤠᤡᤢᤣᤤᤥᤦᤧᤨᤩᤪᤫ᤬᤭᤮᤯ᤰᤱᤲᤳᤴᤵᤶᤷᤸ᤻᤹᤺᤼᤽᤾᤿᥀᥁᥂᥃᥄᥅᥆᥇᥈᥉᥊᥋᥌᥍᥎᥏ᥐᥑᥒᥓᥔᥕᥖᥗᥘᥙᥚᥛᥜᥝᥞᥟᥠᥡᥢᥣᥤᥥᥦᥧᥨᥩᥪᥫᥬᥭ᥮᥯ᥰᥱᥲᥳᥴ᥵᥶᥷᥸᥹᥺᥻᥼᥽᥾᥿ᦀᦁᦂᦃᦄᦅᦆᦇᦈᦉᦊᦋᦌᦍᦎᦏᦐᦑᦒᦓᦔᦕᦖᦗᦘᦙᦚᦛᦜᦝᦞᦟᦠᦡᦢᦣᦤᦥᦦᦧᦨᦩᦪᦫ᦬᦭᦮᦯ᦰᦱᦲᦳᦴᦵᦶᦷᦸᦹᦺᦻᦼᦽᦾᦿᧀᧁᧂᧃᧄᧅᧆᧇᧈᧉ᧊᧋᧌᧍᧎᧏᧐᧑᧒᧓᧔᧕᧖᧗᧘᧙᧚᧛᧜᧝᧞᧟᧠᧡᧢᧣᧤᧥᧦᧧᧨᧩᧪᧫᧬᧭᧮᧯᧰᧱᧲᧳᧴᧵᧶᧷᧸᧹᧺᧻᧼᧽᧾᧿ᨀᨁᨂᨃᨄᨅᨆᨇᨈᨉᨊᨋᨌᨍᨎᨏᨐᨑᨒᨓᨔᨕᨖᨘᨗᨙᨚᨛ᨜᨝᨞᨟ᨠᨡᨢᨣᨤᨥᨦᨧᨨᨩᨪᨫᨬᨭᨮᨯᨰᨱᨲᨳᨴᨵᨶᨷᨸᨹᨺᨻᨼᨽᨾᨿᩀᩁᩂᩃᩄᩅᩆᩇᩈᩉᩊᩋᩌᩍᩎᩏᩐᩑᩒᩓᩔᩕᩖᩗᩘᩙᩚᩛᩜᩝᩞ᩟᩠ᩡᩢᩣᩤᩥᩦᩧᩨᩩᩪᩫᩬᩭᩮᩯᩰᩱᩲᩳᩴ᩵᩶᩷᩸᩹᩺᩻᩼᩽᩾᩿᪀᪁᪂᪃᪄᪅᪆᪇᪈᪉᪊᪋᪌᪍᪎᪏᪐᪑᪒᪓᪔᪕᪖᪗᪘᪙᪚᪛᪜᪝᪞᪟᪠᪡᪢᪣᪤᪥᪦ᪧ᪨᪩᪪᪫᪬᪭᪮᪯᪵᪶᪷᪸᪹᪺᪽᪰᪱᪲᪳᪴᪻᪼᪾ᪿᫀ᫃᫄᫊᫁᫂᫅᫆᫇᫈᫉᫋ᫌᫍᫎ᫏᫐᫑᫒᫓᫔᫕᫖᫗᫘᫙᫚᫛᫜᫝᫞᫟᫠᫡᫢᫣᫤᫥᫦᫧᫨᫩᫪᫫᫬᫭᫮᫯᫰᫱᫲᫳᫴᫵᫶᫷᫸᫹᫺᫻᫼᫽᫾᫿ᬀᬁᬂᬃᬄᬅᬆᬇᬈᬉᬊᬋᬌᬍᬎᬏᬐᬑᬒᬓᬔᬕᬖᬗᬘᬙᬚᬛᬜᬝᬞᬟᬠᬡᬢᬣᬤᬥᬦᬧᬨᬩᬪᬫᬬᬭᬮᬯᬰᬱᬲᬳ᬴ᬵᬶᬷᬸᬹᬺᬻᬼᬽᬾᬿᭀᭁᭂᭃ᭄ᭅᭆᭇᭈᭉᭊᭋᭌ᭍᭎᭏᭐᭑᭒᭓᭔᭕᭖᭗᭘᭙᭚᭛᭜᭝᭞᭟᭠᭡᭢᭣᭤᭥᭦᭧᭨᭩᭪᭬᭫᭭᭮᭯᭰᭱᭲᭳᭴᭵᭶᭷᭸᭹᭺᭻᭼᭽᭾᭿ᮀᮁᮂᮃᮄᮅᮆᮇᮈᮉᮊᮋᮌᮍᮎᮏᮐᮑᮒᮓᮔᮕᮖᮗᮘᮙᮚᮛᮜᮝᮞᮟᮠᮡᮢᮣᮤᮥᮦᮧᮨᮩ᮪᮫ᮬᮭᮮᮯ᮰᮱᮲᮳᮴᮵᮶᮷᮸᮹ᮺᮻᮼᮽᮾᮿᯀᯁᯂᯃᯄᯅᯆᯇᯈᯉᯊᯋᯌᯍᯎᯏᯐᯑᯒᯓᯔᯕᯖᯗᯘᯙᯚᯛᯜᯝᯞᯟᯠᯡᯢᯣᯤᯥ᯦ᯧᯨᯩᯪᯫᯬᯭᯮᯯᯰᯱ᯲᯳᯴᯵᯶᯷᯸᯹᯺᯻᯼᯽᯾᯿ᰀᰁᰂᰃᰄᰅᰆᰇᰈᰉᰊᰋᰌᰍᰎᰏᰐᰑᰒᰓᰔᰕᰖᰗᰘᰙᰚᰛᰜᰝᰞᰟᰠᰡᰢᰣᰤᰥᰦᰧᰨᰩᰪᰫᰬᰭᰮᰯᰰᰱᰲᰳᰴᰵᰶ᰷᰸᰹᰺᰻᰼᰽᰾᰿᱀᱁᱂᱃᱄᱅᱆᱇᱈᱉᱊᱋᱌ᱍᱎᱏ᱐᱑᱒᱓᱔᱕᱖᱗᱘᱙ᱚᱛᱜᱝᱞᱟᱠᱡᱢᱣᱤᱥᱦᱧᱨᱩᱪᱫᱬᱭᱮᱯᱰᱱᱲᱳᱴᱵᱶᱷᱸᱹᱺᱻᱼᱽ᱾᱿ᲀᲁᲂᲃᲄᲅᲆᲇᲈᲉᲊ᲋᲌᲍᲎᲏ᲐᲑᲒᲓᲔᲕᲖᲗᲘᲙᲚᲛᲜᲝᲞᲟᲠᲡᲢᲣᲤᲥᲦᲧᲨᲩᲪᲫᲬᲭᲮᲯᲰᲱᲲᲳᲴᲵᲶᲷᲸᲹᲺ᲻᲼ᲽᲾᲿ᳀᳁᳂᳃᳄᳅᳆᳇᳈᳉᳊᳋᳌᳍᳎᳏᳐᳑᳒᳓᳔᳕᳖᳗᳘᳙᳜᳝᳞᳟᳚᳛᳠᳡᳢᳣᳤᳥᳦᳧᳨ᳩᳪᳫᳬ᳭ᳮᳯᳰᳱᳲᳳ᳴ᳵᳶ᳷᳸᳹ᳺ᳻᳼᳽᳾᳿ᴀᴁᴂᴃᴄᴅᴆᴇᴈᴉᴊᴋᴌᴍᴎᴏᴐᴑᴒᴓᴔᴕᴖᴗᴘᴙᴚᴛᴜᴝᴞᴟᴠᴡᴢᴣᴤᴥᴦᴧᴨᴩᴪᴫᴬᴭᴮᴯᴰᴱᴲᴳᴴᴵᴶᴷᴸᴹᴺᴻᴼᴽᴾᴿᵀᵁᵂᵃᵄᵅᵆᵇᵈᵉᵊᵋᵌᵍᵎᵏᵐᵑᵒᵓᵔᵕᵖᵗᵘᵙᵚᵛᵜᵝᵞᵟᵠᵡᵢᵣᵤᵥᵦᵧᵨᵩᵪᵫᵬᵭᵮᵯᵰᵱᵲᵳᵴᵵᵶᵷᵸᵹᵺᵻᵼᵽᵾᵿᶀᶁᶂᶃᶄᶅᶆᶇᶈᶉᶊᶋᶌᶍᶎᶏᶐᶑᶒᶓᶔᶕᶖᶗᶘᶙᶚᶛᶜᶝᶞᶟᶠᶡᶢᶣᶤᶥᶦᶧᶨᶩᶪᶫᶬᶭᶮᶯᶰᶱᶲᶳᶴᶵᶶᶷᶸᶹᶺᶻᶼᶽᶾᶿ           ‌‍‎‏‐‑‒–—―‖‗‘’‚‛“”„‟†‡•‣‥…‧‰‱′″‴‵‶‷‸‹›※‼‽‾‿⁀⁁⁂⁃⁄⁅⁆⁇⁈⁉⁊⁋⁌⁍⁎⁏⁐⁑⁒⁓⁔⁕⁖⁗⁘⁙⁚⁛⁜⁝⁞⁡⁢⁣⁤⁥⁦⁧⁨⁩⁪⁫⁬⁭⁮⁯⁰ⁱ⁲⁳⁴⁵⁶⁷⁸⁹⁺⁻⁼⁽⁾ⁿ₀₁₂₃₄₅₆₇₈₉₊₋₌₍₎ₐₑₒₓₔₕₖₗₘₙₚₛₜ₝₞₟₠₡₢₣₤₥₦₧₨₩₪₫€₭₮₯₰₱₲₳₴₵₶₷₸₹₺₻₼₽₾₿⃀⃁⃂⃃⃄⃅⃆⃇⃈⃉⃊⃋⃌⃍⃎⃏⃒⃓⃘⃙⃚⃐⃑⃔⃕⃖⃗⃛⃜⃝⃞⃟⃠⃡⃢⃣⃤⃥⃦⃪⃫⃨⃬⃭⃮⃯⃧⃩⃰⃱⃲⃳⃴⃵⃶⃷⃸⃹⃺⃻⃼⃽⃾⃿℀℁ℂ℃℄℅℆ℇ℈℉ℊℋℌℍℎℏℐℑℒℓ℔ℕ№℗℘ℙℚℛℜℝ℞℟℠℡™℣ℤ℥Ω℧ℨ℩KÅℬℭ℮ℯℰℱℲℳℴℵℶℷℸℹ℺℻ℼℽℾℿ⅀⅁⅂⅃⅄ⅅⅆⅇⅈⅉ⅊⅋⅌⅍ⅎ⅏⅐⅑⅒⅓⅔⅕⅖⅗⅘⅙⅚⅛⅜⅝⅞⅟Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
Ⅺ
Ⅻ
ⅽ
ⅾ
ⅿ
ↀ
ↁ
ↂ
ↃↄⅯⅰⅱⅲⅳⅴⅵⅶⅷⅸⅹⅺⅻ↉←↑→↓↔↕↖↗↘↙↚↛↜↝↞↟↠↡↢↣↤↥↦↧↨↩↪↫↬↭↮↯↰↱↲↳↴↵↶↷↸↹↺↻↼↽↾↿⇀⇁⇂⇃⇄⇅⇆⇇⇈⇉⇊⇋⇌⇍⇎⇏⇐⇑⇒⇓⇔⇕⇖⇗⇘⇙⇚⇛⇜⇝⇞⇟⇠⇡⇢⇣⇤⇥⇦⇧⇨⇩⇪⇫⇬⇭⇮⇯⇰⇱⇲⇳⇴⇵⇶⇷⇸⇹⇺⇻⇼⇽⇾⇿∀∁∂∃∄∅∆∇∈∉∊∋∌∍∎∏∐∑−∓∔∕∖∗∘∙√∛∜∝∞∟∠∡∢∣∤∥∦∧∨∩∪∫∬∭∮∯∰∱∲∳∴∵∶∷∸∹∺∻∼∽∾∿≀≁≂≃≄≅≆≇≈≉≊≋≌≍≎≏≐≑≒≓≔≕≖≗≘≙≚≛≜≝≞≟≠≡≢≣≤≥≦≧≨≩≪≫≬≭≮≯≰≱≲≳≴≵≶≷≸≹≺≻≼≽≾≿⊀⊁⊂⊃⊄⊅⊆⊇⊈⊉⊊⊋⊌⊍⊎⊏⊐⊑⊒⊓⊔⊕⊖⊗⊘⊙⊚⊛⊜⊝⊞⊟⊠⊡⊢⊣⊤⊥⊦⊧⊨⊩⊪⊫⊬⊭⊮⊯⊰⊱⊲⊳⊴⊵⊶⊷⊸⊹⊺⊻⊼⊽⊾⊿⋀⋁⋂⋃⋄⋅⋆⋇⋈⋉⋊⋋⋌⋍⋎⋏⋐⋑⋒⋓⋔⋕⋖⋗⋘⋙⋚⋛⋜⋝⋞⋟⋠⋡⋢⋣⋤⋥⋦⋧⋨⋩⋪⋫⋬⋭⋮⋯⋰⋱⋲⋳⋴⋵⋶⋷⋸⋹⋺⋻⋼⋽⋾⋿⌀⌁⌂⌃⌄⌅⌆⌇⌈⌉⌊⌋⌌⌍⌎⌏⌐⌑⌒⌓⌔⌕⌖⌗⌘⌙⌚⌛⌜⌝⌞⌟⌠⌡⌢⌣⌤⌥⌦⌧⌨〈〉⌫⌬⌭⌮⌯⌰⌱⌲⌳⌴⌵⌶⌷⌸⌹⌺⌻⌼⌽⌾⌿⍀⍁⍂⍃⍄⍅⍆⍇⍈⍉⍊⍋⍌⍍⍎⍏⍐⍑⍒⍓⍔⍕⍖⍗⍘⍙⍚⍛⍜⍝⍞⍟⍠⍡⍢⍣⍤⍥⍦⍧⍨⍩⍪⍫⍬⍭⍮⍯⍰⍱⍲⍳⍴⍵⍶⍷⍸⍹⍺⍻⍼⍽⍾⍿⎀⎁⎂⎃⎄⎅⎆⎇⎈⎉⎊⎋⎌⎍⎎⎏⎐⎑⎒⎓⎔⎕⎖⎗⎘⎙⎚⎛⎜⎝⎞⎟⎠⎡⎢⎣⎤⎥⎦⎧⎨⎩⎪⎫⎬⎭⎮⎯⎰⎱⎲⎳⎴⎵⎶⎷⎸⎹⎺⎻⎼⎽⎾⎿⏀⏁⏂⏃⏄⏅⏆⏇⏈⏉⏊⏋⏌⏍⏎⏏⏐⏑⏒⏓⏔⏕⏖⏗⏘⏙⏚⏛⏜⏝⏞⏟⏠⏡⏢⏣⏤⏥⏦⏧⏨⏩⏪⏫⏬⏭⏮⏯⏰⏱⏲⏳⏴⏵⏶⏷⏸⏹⏺⏻⏼⏽⏾⏿␀␁␂␃␄␅␆␇␈␉␊␋␌␍␎␏␐␑␒␓␔␕␖␗␘␙␚␛␜␝␞␟␠␡␢␣␤␥␦␧␨␩␪␫␬␭␮␯␰␱␲␳␴␵␶␷␸␹␺␻␼␽␾␿           ‌‍‎‏‐‑‒–—―‖‗‘’‚‛“”„‟†‡•‣․‥…‧  ‪‫‬‭‮ ‰‱′″‴‵‶‷‸‹›※‼‽‾‿⁀⁁⁂⁃⁄⁅⁆⁇⁈⁉⁊⁋⁌⁍⁎⁏⁐⁑⁒⁓⁔⁕⁖⁗⁘⁙⁚⁛⁜⁝⁞⁡⁢⁣⁤⁥⁦⁧⁨⁩⁪⁫⁬⁭⁮⁯⁰ⁱ⁲⁳⁴⁵⁶⁷⁸⁹⁺⁻⁼⁽⁾ⁿ₀₁₂₃₄₅₆₇₈₉₊₋₌₍₎ₐₑₒₓₔₕₖₗₘₙₚₛₜ₝₞₟₠₡₢₣₤₥₦₧₨₩₪₫€₭₮₯₰₱₲₳₴₵₶₷₸₹₺₻₼₽₾₿⃀⃁⃂⃃⃄⃅⃆⃇⃈⃉⃊⃋⃌⃍⃎⃏⃒⃓⃘⃙⃚⃐⃑⃔⃕⃖⃗⃛⃜⃝⃞⃟⃠⃡⃢⃣⃤⃥⃦⃪⃫⃨⃬⃭⃮⃯⃧⃩⃰⃱⃲⃳⃴⃵⃶⃷⃸⃹⃺⃻⃼⃽⃾⃿℀℁ℂ℃℄℅℆ℇ℈℉ℊℋℌℍℎℏℐℑℒℓ℔ℕ№℗℘ℙℚℛℜℝ℞℟℠℡™℣ℤ℥Ω℧ℨ℩KÅℬℭ℮ℯℰℱℲℳℴℵℶℷℸℹ℺℻ℼℽℾℿ⅀⅁⅂⅃⅄ⅅⅆⅇⅈⅉ⅊⅋⅌⅍ⅎ⅏⅐⅑⅒⅓⅔⅕⅖⅗⅘⅙⅚⅛⅜⅝⅞⅟Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
Ⅺ
Ⅻ
ⅽ
ⅾ
ⅿ
ↀ
ↁ
ↂ
ↃↄⅯⅰⅱⅲⅳⅴⅵⅶⅷⅸⅹⅺⅻ↉←↑→↓↔↕↖↗↘↙↚↛↜↝↞↟↠↡↢↣↤↥↦↧↨↩↪↫↬↭↮↯↰↱↲↳↴↵↶↷↸↹↺↻↼↽↾↿⇀⇁⇂⇃⇄⇅⇆⇇⇈⇉⇊⇋⇌⇍⇎⇏⇐⇑⇒⇓⇔⇕⇖⇗⇘⇙⇚⇛⇜⇝⇞⇟⇠⇡⇢⇣⇤⇥⇦⇧⇨⇩⇪⇫⇬⇭⇮⇯⇰⇱⇲⇳⇴⇵⇶⇷⇸⇹⇺⇻⇼⇽⇾⇿∀∁∂∃∄∅∆∇∈∉∊∋∌∍∎∏∐∑−∓∔∕∖∗∘∙√∛∜∝∞∟∠∡∢∣∤∥∦∧∨∩∪∫∬∭∮∯∰∱∲∳∴∵∶∷∸∹∺∻∼∽∾∿≀≁≂≃≄≅≆≇≈≉≊≋≌≍≎≏≐≑≒≓≔≕≖≗≘≙≚≛≜≝≞≟≠≡≢≣≤≥≦≧≨≩≪≫≬≭≮≯≰≱≲≳≴≵≶≷≸≹≺≻≼≽≾≿⊀⊁⊂⊃⊄⊅⊆⊇⊈⊉⊊⊋⊌⊍⊎⊏⊐⊑⊒⊓⊔⊕⊖⊗⊘⊙⊚⊛⊜⊝⊞⊟⊠⊡⊢⊣⊤⊥⊦⊧⊨⊩⊪⊫⊬⊭⊮⊯⊰⊱⊲⊳⊴⊵⊶⊷⊸⊹⊺⊻⊼⊽⊾⊿⋀⋁⋂⋃⋄⋅⋆⋇⋈⋉⋊⋋⋌⋍⋎⋏⋐⋑⋒⋓⋔⋕⋖⋗⋘⋙⋚⋛⋜⋝⋞⋟⋠⋡⋢⋣⋤⋥⋦⋧⋨⋩⋪⋫⋬⋭⋮⋯⋰⋱⋲⋳⋴⋵⋶⋷⋸⋹⋺⋻⋼⋽⋾⋿⌀⌁⌂⌃⌄⌅⌆⌇⌈⌉⌊⌋⌌⌍⌎⌏⌐⌑⌒⌓⌔⌕⌖⌗⌘⌙⌚⌛⌜⌝⌞⌟⌠⌡⌢⌣⌤⌥⌦⌧⌨〈〉⌫⌬⌭⌮⌯⌰⌱⌲⌳⌴⌵⌶⌷⌸⌹⌺⌻⌼⌽⌾⌿⍀⍁⍂⍃⍄⍅⍆⍇⍈⍉⍊⍋⍌⍍⍎⍏⍐⍑⍒⍓⍔⍕⍖⍗⍘⍙⍚⍛⍜⍝⍞⍟⍠⍡⍢⍣⍤⍥⍦⍧⍨⍩⍪⍫⍬⍭⍮⍯⍰⍱⍲⍳⍴⍵⍶⍷⍸⍹⍺⍻⍼⍽⍾⍿⎀⎁⎂⎃⎄⎅⎆⎇⎈⎉⎊⎋⎌⎍⎎⎏⎐⎑⎒⎓⎔⎕⎖⎗⎘⎙⎚⎛⎜⎝⎞⎟⎠⎡⎢⎣⎤⎥⎦⎧⎨⎩⎪⎫⎬⎭⎮⎯⎰⎱⎲⎳⎴⎵⎶⎷⎸⎹⎺⎻⎼⎽⎾⎿⏀⏁⏂⏃⏄⏅⏆⏇⏈⏉⏊⏋⏌⏍⏎⏏⏐⏑⏒⏓⏔⏕⏖⏗⏘⏙⏚⏛⏜⏝⏞⏟⏠⏡⏢⏣⏤⏥⏦⏧⏨⏩⏪⏫⏬⏭⏮⏯⏰⏱⏲⏳⏴⏵⏶⏷⏸⏹⏺⏻⏼⏽⏾⏿␀␁␂␃␄␅␆␇␈␉␊␋␌␍␎␏␐␑␒␓␔␕␖␗␘␙␚␛␜␝␞␟␠␡␢␣␤␥␦␧␨␩␪␫␬␭␮␯␰␱␲␳␴␵␶␷␸␹␺␻␼␽␾␿           ‌‍‎‏‐‑‒–—―‖‗‘’‚‛“”„‟†‡•‣․‥…‧  ‪‫‬‭‮ ‰‱′″‴‵‶‷‸‹›※‼‽‾‿

2）　小沢（1997）、清格尔泰（2000）など。

3) 吉本啓（1992）の「個人空間」とほぼ同様の概念だが、厳密にいうと本稿においては、会話空間というものを設定しないため、その解釈が多少異なる。
4) 本稿では再帰辞と呼ぶことにする。王福清著・細井千裕訳（2002：179）では、一般再帰語尾と命名し、人称に関係なく主語に再帰し、「自分の」という意味を表すとしている。

［参考文献］

小沢重男（1997）『蒙古語文語文法講義』大学書林
王福清著・細井千裕訳（2002）『蒙古語教程』内蒙古人民出版社
金善美（2006）『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』風間書房
木村英樹（2012）『中国語文法の意味とかたち―「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究―』白帝社
金水敏（1989）『指示詞と人称・指示詞用例集』「言語情報処理の高度化」研究成果報告未公開
金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』 Vo.6 No.4 pp.67-91
金水敏・田窪行則編（1992）『指示詞』日本語研究資料【第 1 期第 7 巻】 ひつじ書房
佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法（改訂版）』 復刻版（1983）くろしお出版
阪田雪子（1971）「指示語コ・ソ・アの機能について」『東京外国語大学論集』21（金水・田窪編 1992 に再録、pp.54-69）
正保勇（1981）「コ・ソ・ア」の体系『日本語の指示詞』〈日本語教育指導参考書 8〉国立国語研究所 pp.51-122
田窪行則（2010）『日本語の構造 推論と知識管理』 くろしお出版
堤良一（2012）『現代日本語指示詞の総合的研究』 株式会社ココ出版
清格尔泰（2000）『現代蒙古語語法』修訂版 内蒙古人民出版社
哈斯額尔敦等（1996）『現代蒙古語』内蒙古教育出版社
三上章（1955）『現代語法新説』刀江書院 くろしお出版より復刊 1972
吉本啓（1992）「日本語の指示詞コソアの体系」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房 pp.105-122

［用例出典］

Su・dorjijab（2005）『höhe dülü ③』内蒙古人民出版社
波烈沁・达尔罕（2001）『蒙古民间聊斎志异』内蒙古人民出版社
フフバートル（1997）『モンゴル語基礎文法』株式会社インターブックス

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

A Contrastive Study of Demonstratives in the Usage of the Deictic in Japanese and Mongolian Language

—Drawing on the Concepts of Compatible Perspectives and Incompatible Perspectives—

BAYAERDULENG

This paper analyzed demonstratives in Japanese and Mongolian language, drawing on the two concepts of 'personal space' and 'perspective.'

The result showed that 'compatible perspectives' in the Japanese language can be categorized as 'synthesis type' and 'cooperative type,' while in the Mongolian language, only the 'synthesis type' exists. It also indicated that regarding 'incompatible perspectives,' Japanese is 'complete incompatible type,' while Mongolian language is 'complement incompatible type.' It further showed that 'compatible type' that seems similar at first is different in quality.